



~ 13  
2109  
3





2109  
3

萬  
弥



扶桑皇統記圖會前編卷之二目錄

養老淹涌出

仲磨妻貞死條

孝子養老の淹と汲の圖

仲磨留学于唐上

於高樓餓死詠歌

安祿山等ふ欺らんと仲磨樓上ふ餓死する圖

聖武天皇御受禪

満月丸主從討好根條

満月丸母の仇安倍好根と討圖



満月丸呈吉備公血書	江南子母銭の事
吉備大臣入唐	仲磨靈鬼子吉備公語自怨條
吉備大臣鴻臚館めて仲磨が灵小あゝの圖	
唐帝与群臣評議	女東妻諫良入條
吉備大臣与女東圍碁	隆昌女隱黒石吉備公仁知事
吉備公与女東棋と圍とあゝの圖	

目録終

扶桑皇統記圖會前編卷之二

浪華 好華堂野亭参考

養老瀧湧出

仲麻呂妻貞死條

靈龜三年もれ明とて四年丁巳の九月美濃國の守護人より朝廷へ奏聞て曰  
 當國多度山とて深山に醴泉湧出れ其縁故を問れり其當國多度山とて  
 山の麓に任る小佐次とて呼推夫のいかに生貨親小事て甚く孝心深し貧れ身も  
 孝親を尽し更吉の子路曾參も亦其父年七十余才不及常小酒を好  
 て飯を食せし朝夕酒を禮とて歳を保ち酒あり時餓苦し小佐次僅小  
 夫とて産業とて其家極く貧し身力も尽しとて持た其身も兼食を  
 所の錢を尽く酒小易て又と養ひのまに妻と娶むと向孝親小丹誠を凝  
 かりとせむものを得る所の錢を盡くする由又小飲し酒ありを平日小然







ハ芽出度あり。茲又良かり。安部仲九が妻若州が身の上なり。愛子満月  
丸已小三才かり。夫仲九が消息絶てあり。晝夜待てて袖小涙の  
乾く間も。彼悉達太子の后妃耶愉陀羅女。太子出宮の後三年。して羅  
睺羅尊者と生宮中。小笠原晝夜太子の帰りを久しと待て。紅波不袂の  
のひえぬ。今の若州が身の上ぞ思ひ合され。る憂身の上。又二層の愁と重  
なる。其と奈何と。安部好根ハ仲九入唐すと。幸小苗守の邸舎。主帰。虚誕  
乃幻を巧みて。若州江守と。購丸始の裡。偽て篤実の体。おて。り。年月乃  
ま。小従の漸く。小不頼の本姓を露し。垂て心成。け。若州と。己が側室。おせ。と。妻。小解  
て。ま。幻の端。お。や。或ハ色目。小。あ。せ。想と通せん。と。れ。も。貞操正し。草州何  
ぞ不義の為。お。身と汚。と。を。お。却て好根。が。面。と。る。更。と。厭。い。吾。丙。舎。小。引。鏡。を。お。不  
て。弥。夫。の。帰。朝。と。待。心。切。かり。好根。ハ。若州。が。意。小。従。は。ご。成。足。て。信。濃。念。熾。小。今。

と禁。と。の。一。夕。天。の。酒。と。過。し。十。分。の。酔。を。兼。り。若州。が。丙。舎。踏。込。對。面。と。白。頭。日  
我。兼。て。親。く。交。り。西。國。の。者。上。京。し。我。小。結。ま。る。八。脚。身。の。舎。弟。仲。九。殿。ハ。入。唐。の。後  
唐。帝。小。仕。宦。と。食。禄。と。受。妻。と。娶。り。永。く。彼。小。苗。守。と。り。体。た。り。唐。皇。子  
筑。紫。未。だ。者。より。や。り。然。我。弟。帰。朝。と。る。更。有。る。や。子。你。歸。ら。ぬ。天。と  
待。て。後。盛。の。花。と。り。つ。ら。ん。や。我。小。従。ひ。て。妻。と。り。い。後。を。甥。満。月。丸。也。我  
子。と。な。り。緒。善。と。教。成。長。の。後。安。部。の。家。名。と。相。續。さ。せ。む。と。只。出。る。俣  
小。偽。言。と。言。あ。る。を。お。つ。け。小。鏡。を。れ。も。若州。ハ。言。の。答。と。も。お。せ。と。り。兎。首。て。居  
々。と。好。根。猶。も。百。般。小。幻。を。尽。し。強。て。従。は。せ。ん。と。れ。も。若州。ハ。面。も。答。と。お。手  
満。月。丸。と。搔。抱。て。座。と。起。ん。と。る。小。好。根。勃。出。と。怒。と。世。度。し。て。神。を。れ。と。居  
曳。居。眼。と。睜。て。曰。是。ハ。情。の。強。た。女。か。你。が。耳。聾。た。る。も。由。非。と。り。と。居  
一。知。を。受。へ。妻。ハ。も。あ。り。抑。此。家。ハ。我。俗。も。有。る。家。か。又。此。守。弟。の。愛。子。満。月。



聊の科を名として我を追出。仲家と嗣せ、更無慈悲無道の斗らひあはれ  
由我孝道と重んじて父を恨む身退る。仲九入唐の折柄、我の面宇中の後見  
と附託、兄弟の義を思ひて、仕官の俸禄と捨る家へ歸り、你と今日まで後  
安く暮らす。然る小仲九唐帝の臣下となり、歸朝せざれば、我此家を相續せ  
人の理の當然にて、維り身と難むる者ありんや、你も満月丸を便に思ひ、我心小  
従ひて表と俱し。満月丸が身の安穩と量と母の慈悲ともいふ。然る歸らぬ  
夫小操として、我刻小背、貞節小似て貞節あり。我此家と相續して、你母子と  
追出さむ。満月丸父の家名と嗣、更無は、是你仲九對して不貞あり。此の身の  
操、破るとも。夫の猶小家督と嗣とを、其の貞操といふ。猶此理と并ぶ、我小従  
ひんを古より、誘ふり如く、我小難面、又我小難面あり。你母子と追出す迄  
由、満月丸と目前刺殺。你土牢小囚置て、生と殺と、多々の苦患とんを、下

如何やくと迫り、言懼り、回結れども、若州公泣沈みて、声を小まき、好根を  
憤り、斯程小利害と鏡中を、小猶従ひて、其義を先小兒と刺殺し、れん若州  
が抱死する。満月丸が襟搔、爪へ引出さん、きなるを、若州殘れ急お、其手  
遮り、留先、皆し、せ、更左程、ま、小敷あり、ぬき、思ひ、給り、を、脚心、小従ひ  
侍。先、刺し、左右の答、け、進せ、る、脚、の、穢、空、言、我、列、試、侍、り  
あり。弥、脚、の、偽、言、あり、もん、を、今、宵、深、更、人、定、り、て、ま、此、内、舎、へ、來、せ、たま  
宵、の、間、小、流、石、小、包、す、侍、り、と、言、れ、好、根、と、手、を、放、り、怒、り、面、を、和、け、  
せ、後、刻、ある、を、其、時、小、否、と、言、を、満、月、と、生、る、由、殺、す、も、は、你、の、心、小  
有、必、が、契、約、と、違、る、更、か、れ、て、は、邪、智、深、れ、好、根、も、戀、暮、の、周、小、心、深、れ、若  
州、が、家、言、小、欺、る、れ、内、舎、と、出、て、己、が、回、を、う、り、其、後、若、州、の、涙、か、け、之、  
書、小、二、通、の、文、と、手、早、く、書、き、あ、り、て、固、封、し、半、日、意、小、令、侍、女、指、子、と、呼、女



を密小招た私結て好根が無法の戀慕と結り今吾身此家小居る  
原江守の先殿の忌目かりと大安寺へ結う何故や帰りの最遅に待て  
高議せよれれど心せられ少時中此所は居るれどなれは此寐入る若  
我懐れて後門より人の知る事小大安寺へ行江守小此文と渡してよ吾身も  
道せまわれん二入口門を出るを監僕の異しむをれを羊時むう後て  
此館と忍出大安寺へ到る也江守も其由の事一彼御寺にて待て一  
道小江守が帰小逢とも大安寺へ引返して待よと告よと満月な衣服三  
三つむり帛紗小包とて稻子の腰小結付させ寐る吾子と抱れとて稻子小  
渡其寐顔とて覗き不覚潜然と落涙れれ其涙満月な面より忽  
ち目と覚鳴くと泣出るとも若州發手急小乳をさ付て合ませ徐小  
よき透りもれ又とやとと寐入る若州小声小て再び目と覚る肉小疾

く急がれ稻子心得て一通の文を懐小さば彼御寺にて待よとん行  
時も早くま望の事と耳結て遠く立出後門と潜抜て大安寺へ落行ける  
若州其後影と稍少時見送り潜並と涙りれれ真福寺の鐘更々  
と御言て三更の報も小發た守刀と取出佛名十遍并と白刃と抜把心下を  
刺中れ遂小九泉の客と成る哀といふ疎かり噫惜也一莖玉乃玉芙蓉  
悪鳥の為小散凋三更紅顔薄命と皇等の更と細ある也好根かる  
かると争り知能れ宵の過酒小促されて少時枕小倚一睡の夢を結るも三更  
の鐘声小發て眼と覚今夜は更れん事と若州待つんと御言て夜更  
ろひて若州の丙舎のりやち襖と引開て立入るも豈量らん其玉乃小串  
て俯小伏置と血小滌り血腥たる限かれ好根大不倚不離を  
声小呼りるも小を寐定りも侍女昔侍も皆目と覚何更ふやと追て小若





小佐次薩

養老の國  
孝子酒泉  
杖汲心



孝子小佐次

皇統言旨會前



卯が丙舎へ走り行其屍を見て太不孩侍女婢女皆声を放て泣叫び男子の輩は何  
の有害せとも其奴と罵る此を憐れとて憫果する斗なり好根は泣叫女原と叱  
懲り先刺より満月の見えざる不審何處小居や捜し見ると喝令する小侍  
女婢亦涙あがり間毎々尋ねども影もみえず且侍女稲子も家内小居され斯好  
根小告多小借ハ若州が針ひいて彼女が小児を抱れて退りあめ又兼原江守が大  
寺佛緒とて立出今ふ於て立帰ぬ由心得とて大安寺へ人を走らせ若州が屍を  
取収ませぬ其騒動大方もよほど夜更とて明小なる是より以前小安部の雜掌  
兼原江守八船守の目小當成以て菩提所大安寺に結多小法事とて存り  
逢食後に僧と四方の物結して不思時を録し二更の鐘小警れ寺僧小別と  
告て大安寺と立出脚と逸く平城とて行半里針中に端なく侍女稲子小行令  
何更夜中の独身とて何處行やと須り向小稲子小声令て如此との更小侍りと

若州が命令終を告二通の文成渡りぬ江守大不孩好根が不義無道と思ふ  
大安寺小待よの義あれ稲子と伴ひて路引返し再大安寺へ入り門叩て寺中  
へ入寺僧小巨細を語り之室に借て稲子と坐すめ其身中坐小著て先二通の文と取出  
一灯小照して表紀をなれ二通六満月九殿へ有今一通江守殿と有小江守眉と  
ひま未だ幼れ若君の脚文と心得ぬと思ひあら我が名當の文の封押切て續き  
と其文意ハ好根が不法の不義と言うけ承引をな満月九と害せんとりふより満月  
丸ハ稲子小懐せて其絆へ送り吾身ハ操と守り今夜自害し侍り何年満月九と  
守育我夫の帰朝しと待父親小對面をなら筆の歩り支度路小書記  
たり江守續更一遍と大不孩れ是ハ何と憫果稲子ハ若州が自害とるよの文書  
と更と等く苦し声を放て泣伏る江守急小制しあら人や泣声を立と此脚文の  
初めて推量を此寺小待よと仰せる若君と伴小託と館と落させんとり假言をて



你とて若君と我小純こじゆんの御心遣ごこころつかひあり。噫あや世小難よこがた有列女れつにょ小命こいのちの死傷しやうもて  
せしと悼しのまし。れは貞操ていそうの女にょ主しゆ小更さら易やすり。憎にくむむれは好根こうこん殿どのなり。先君せんくんも追出おひだし  
る。程ほどの無道人むどうじん多おほれ。主君しゆくん入唐にっぽうののちの後のち田守たのりの後見ごけんを頼たのれと言いて来きり。好根こうこん  
信まじらふ思おもひしをも。正ただしく主家しゆけの嫡男てつなんあれを辞いなまて。主君しゆくんの帰朝きしやうあり。まこと  
思おもひ田置たのりへ全まく我過わがあまりあり。彼邪人かじやじん始はじの程ほどを駕か実じつら。見みる女にょ主しゆて欺あざむ。主君しゆくん  
帰朝きしやう遅おそく三年さんねんの月日つきひすす。小放こはな傷やう無頼むらいの本姓ほんせい見みる弟あにの妻つま小横よこ徳とく慕ぼし。心こころ小従しゆじゆ  
へ。若君にょくんと切害せつかいせん。人質ひとぢを取とりて追おひ。鏡かがみへ以もつて女にょ主しゆへ。幼君おとくんと我小純こじゆんと好根こうこん  
殿どのの害がいと避よけ。其身そのみ節操せつそうと破やぶれ。と自害じがいし。ゆい。あ。好根こうこんハ眼前がんぜん女にょ主しゆの仇あだ。入いり。池い  
行いて討取うちとり。更さら難がたな。あ。れ。家いへの嫡子てつしあれ。後日ごひ小公ここうの御沙汰ごさた如何いかあ。ん。も。量り  
り。不如あか。皆みなく復仇ふくちゆうの期きと延のび。主君しゆくんの帰朝きしやう。ゆい。待まちて。今いまの恨うらみ。成な。暗くらみ。あ。ん。は。は。は。は。  
若君にょくんと守音しゆおんなる。社やしろ。要えいを。今いま。此こゝ。寺てら。小こ。て。維ま。待まち。人ひと。何なに。願ねが。ひ。た。り。も。身み。入い。り。て。

時節ときせつと待人たいじん彼好根かこうこん主君しゆくんの家督けとくと押領おしりやうし。若君にょくんの所在しやうざんと搜さがして害がいせん。と。手て。小純こじゆん  
お。あ。れ。れ。都みやこ。近ちか。れ。所ところ。小置こおき。進すす。む。危あや。し。を。迎むか。ひ。ま。乳ちち。離はな。れ。も。あ。ら。ぬ。若君にょくんと抱かか。り。て  
遠とほ。回まわ。り。人ひと。更さら。も。難がた。淡たん。かり。先まづ。手て。近ちか。れ。所ところ。小忍こにん。び。て。幼君おとくんの飢う。む。さ。さ。り。と。勤つと。要えい。あ。ん。  
や。小指こさし。子こ。今いま。ハ。泣な。む。と。も。其その。甲かみ。也なり。有あ。り。と。手て。歎なげ。き。成な。止とど。り。て。落お。行ゆ。人ひと。方かた。と。案あん。下くだ。り。と  
言い。ふ。れ。れ。小指こさし。子こ。よ。く。涙なみだ。と。ま。き。吾身われみの兄あに。平ひら。城じやう。近ちか。れ。置おき。の。里さと。小住こぢ。り。賤せん。を。農い。人にん  
あれ。も。正ただ。直ただ。律りつ。氣きの。性せい。あれ。れ。巨細こほ。を。語かた。り。て。頼たの。ま。を。否いな。と。手て。侍しやう。り。且かつ。兄あに。嫁よめ。去い。年とし。産う。  
を。せ。由よし。あれ。れ。其その。乳ちち。汁じゆ。と。分わか。り。て。若君にょくん。成な。盲めくら。と。進すす。む。ハ。如何いか。侍しやう。る。分わか。れ。と。ゆ。い。と。江守えしゆ。膝ひざ  
と。拍う。其その。小増こぞう。と。寺てら。僧そう。小礼れい。謝しゃ。と。述の。大だい。安あん。寺てら。と。出い。で。夜道よみちの。暗くら。み。と。厭いと。ふ。と。兩りゆう。人にん。幼おと。王おう。と  
方かた。行ゆ。り。と。寺てら。僧そう。小礼れい。謝しゃ。と。述の。大だい。安あん。寺てら。と。出い。で。夜道よみちの。暗くら。み。と。厭いと。ふ。と。兩りゆう。人にん。幼おと。王おう。と  
守しゆ。て。空くう。置おき。の。里さと。と。刺さ。往むか。り。好根こうこん。が。下知げち。を受う。り。武ぶ。士し。等ら。ハ。脚あし。を。逸よ。り。て。大だい。安あん。寺てら。と  
馳は。り。り。門かど。を。小敵せうてき。きて。第ついで。原はら。江守えしゆ。と。向むか。ひ。門かど。番ばん。小味せうみ。惚ぼ。と。る。声こゑ。を。て。其その。と。刺さ。往むか。り。り。



のりまると各々諸路の違ひて逢さずあめども又引返して我主の即食を帰リ  
 斯と好根小告れを好根心異をか後日小尋ひ出さず社あめども江守稲子  
 の妻先捨置家内の男女小口止と若舛病死せと披露と野辺送し夫久  
 仲九が留守主と称し心安部の家督と押領し其頃長屋王と稱す高家有此公  
 天武天皇の孫小當を甚く威勢強く朝廷の御用ひも重り久を長屋王の館  
 に入賄賂と贈りて阿綾ひあれ仲九唐土あて死亡せよかと心中祈り又時ふ  
 満月丸の所在を尋探り切害と後の患成除んと巧多の悪むぬれ奸悪と  
 仲麻呂留守唐土 於高樓餓死詠歌事  
 却說遣唐使副使以下四艘の倭船海上障り唐朝の開元五年丙辰五月小  
 明測の港小着船一多治比縣守藤原宇合其他判官録事以下安部仲九小  
 舟船より下て長安の都小到り唐土の鴻臚館小入て休息し船路の疲を

惣め其後聘物と齋と王宮到り和親の禮成演聘物と獻呈せり  
 帝喜悅有て遣唐使の面と華清宮へ捧拍せられ多仲九も倭使の  
 後小従ひ席末小着て熟坐殿中と見廻す小先正面小華清宮の三字と題せ  
 一金字の額と掛屏風障子種々の彫物各五斗と尺と寸と寛く視同ゆあや小  
 金銀珠玉小鏤り錦の帳綾の幔幕晃れり其餘の莊嚴結構心小細  
 及小ぬ絆たり儲主位小七寶の飾せ椅子小虎皮を敷掛て玄宗皇帝玉  
 冠と頂き蜀江の錦の袍と著し珊瑚の笏と把て悠々腰帯懸け其左を  
 張九齡嘉許觀安祿山楊國忠以下の大臣々々錦綉羅の朝服と着し  
 冠と平々威儀堂々と列し八眼と警童子壯觀たり々々時小玄宗帝御  
 日本天子の即位を慶賀せられ種々の珍宝絳帛と獻進ありれも倭國大使  
 由釋宣小就て各禮と述す小礼儀畢て後玄宗帝倭國の人と沈香亭と号







九齡の字友王唐李結李白以下の詩人文人とも交りて結び詩文の贈答ありける  
皆仲た秀才と感ぜぬわろ多し仲九待文六望かく只一日早く彼金  
玉兎集と字取て師朝せんと或時九齡小玉兎集と園一由と結る小九歳曰  
彼書ハ朝廷の秘書小て厩官とりとも立り小園とも更能く只秘書監  
朝廷の典籍と預る官あれ玉兎集も看吏と得るなりされ彼書のハ予が力  
少め及む守との本と仲九心中甚だ憂ひ我適合人親玉揮出され勅命奉  
りて此土渡りかたの玉兎集と見ると更不能く後小光陰と送る吏社  
安んぬさそ天皇の待久く思ひぬ思ふ更小寢食の間安んず百般小思  
これ玉兎集と園とみ方便かく此上夜小玄宗帝の臣下とわろ如何もして  
秘書監の官小到り彼玉兎集と看るものと思慮を定め張九齡小唐帝乃  
臣下小かり度由と告ぐれば九齡斜め手尻小足下りそが大王の臣下とありぬ

大いなる吾國の福なりとて朝奉して玄宗帝小斯と執奏する小玄宗帝  
て仲九が俊才と太子白小及及れれを即ち望小任せて官符とあえ名と朝衡と  
呼て近臣と常小左右侍せぬる仲九心中小秘書監の官小任ずれん  
との西まあれ万吏小心とめて事更玄宗帝仲九と深く愛し晝も座右と  
去しぬ追小官位と進められぬもいふ秘書監とて小登されざり多し仲九昔  
を隔て足と搔心地一春よ秋よと送りて不覺入唐してより十四年の星霜と往  
うか仲九大い小氣を焦ち斯ては何年望と遂をた天地と拜して秘書監小進ん  
事と祈りたる小其誠心や通らえ玄宗帝遂小仲九と秘書監の官小任ずれぬ  
小ぞ仲九天小上る思とかり是より朝廷の書籍と預り多年望一金鳥玉兎集と園  
まる吏と得る然れも大切の秘書あれ字一取更能く只管職漬して悉く  
紀ト今不望と足ぬとて夫より帰心箭のぞ去玄宗帝志を致仕と願ひしる



唐帝敢て免されど。又官位と進めて左補闕と。高官に任じ、命罷遇深う。名  
を仲九已と得ど。又年とを往りたる。去程本朝して元正天皇養老七年。不  
宝位と皇太子豊櫻彦皇太子聖武の御身八上天皇とありせり。ひるが  
安部仲九玉免集と借求ん。入唐し。己小十五年と歴ども。今以て帰朝せむ。何乃  
音信もあらず。藤原清川と遣唐大使。大野古大を副使と。判官録事  
次相添て入唐させり。仲九と同道して帰朝と下と。詔命。清川奉りて日  
本の地と船出。海上滞なく唐土。着船。長安の都に到り。王宮に参りて。聘禮  
首尾と相と。仲九も對面。太上天皇久く待り。びり。今度五京帰朝と。前  
日船と歸る。紹り。其準備せられ。告其日。別て旅館と。取り。其夜  
仲九清川が旅館に到り對面して。曰小臣天皇の勅詔を奉り。入唐して。字向と名と  
金烏玉免集と。聞せん。欲とれども。唐帝の秘書あれ。容易小者。吏能と。さる小

よて。依小唐帝の臣下とかり。秘書監の官に進彼。秘書と。取んと。千苦万勞す  
吏十年。悴して。秘書監の官と得て。玉免集と。看ると。りども。朝廷の大秘録。あれ  
ども。僚のあれ。折り。小字と取。又あらず。め。膽小。彫て。暗記。今。歸朝して。曆法乃  
秘決と。奏聞せん。唐帝。小致仕を乞ふ。敢て。許され。官と進め。祿と加て。抑留  
せらる。小依。已。更と得ど。又。二年の月日。送り。貴卿。明日。唐帝。小見。我。日本  
へ。歸。さる。ず。願。かり。ひ。と。袖。中。より。五言律の詩。一。筆。と。把。出。して。清川。小。呈。り。名  
を。清川。承。緒。と。詩。筆。と。収。め。翌。日。華。清宮。に。参。り。て。歸。朝。の。辭。と。乞。次。小。仲。九。が  
詩。と。呈。し。安。部。仲。九。學。問。修。行。の。事。大。國。渡。り。久。く。留。學。して。多。く。帝。恩。と。蒙。り。  
り。小。吏。万。謝。し。ま。り。其。小。皇。太子。仲。九。が。歸。朝。と。事。足。致。朝。て。待。り。て。と。妻。年。小。  
此。度。臣。が。貴。國。に。参。り。小。付。必。と。仲。九。が。辭。と。願。ひ。船。と。歸。朝。せ。よ。との。事。  
万。望。仲。九。と。倭。國。へ。歸。り。め。と。願。ひ。な。れ。と。皇。帝。先。詩。筆。と。用。た。え。と。其。事。小。

三十一 己 國 會 行 記 卷 一



街命將辭國 非才忝侍臣 天中意明主 海外憶慈親

伏奏違金闕 駢駢去玉津 蓬萊鄉路遠 若木故園隣

西望憶恩日 東歸感義辰 平生一寶劍 留贈結交人

帝甚感恩日 清川乞小任 仲九古鄉慕 情憐遂小歸朝

帝許甚感恩 清川乞小任 仲九古鄉慕 情憐遂小歸朝

流と年来の鴻恩を謝し 辭別と言上つれば 玄宗帝多々の珍器給帛金銀

と饒別給ひたり 斯て仲九の歸朝の願叶ひて悦び勇々清川以下と俱小猿

館(到り方の準備と綱へ衆と等長安と幾足明洲の港(到る小兼て仲九

と交を結し 張九齡魏萬王維李白の名士仲九が出船を見送んとて

出来り 官舎の高樓小登りて 饒別の酒と酌り 列位時惜とて作る待白

送秘書監還日本

王維

積水不可極 安知滄海東 九州何處遠 万里若乘空

向國唯看日 歸帆但信風 鰲身映天黑 魚眼射波紅

卿樹扶桑外 主人孤鴻中 別離方異域 音信若為通

送日本國聘賀使晁臣卿東歸

上文生下國 東海是西隣 九譯蕃君使 包佶

野情偏得禮 木性本含仁 錦帆乘風轉 千年聖主臣

孤城開蜃閣 曉日上車輪 早議本朝歲 塗山玉帛均

其餘略也 斯て酒宴長日 西没て月東天小澄上り 殊更一天小雲力く月景

の面白くを衆客眺め 奥の仲九心中古郷三笠山の吏を思ひ 中

残す妻若艸 平小産の奴や 解ん都を出 砌さし由別と珍れ

春秋は倭國唐土の隔住を 暎賞の待ねんと思ふを 弥帰心胸の道り

送日本國聘賀使晁臣卿東歸

包佶



澄上る月影と妻の三笠山の邸舎をこぼむんとて一首の和歌と詠はる

天のもろろりさけえれを春日なる三笠の山より出し月も

とどろ流るを清川古名以下倭人をあつ感し適秀逸くを答れも唐人亦

も倭歌と知れど如何なる意とや向ふ仲丸漢語を以て如此くの意味なりと

註解して交せざるを待人も深く感ず斯て満座酔と尽して酒宴を収め唐

人の別を告て飲り倭人も船中へ杜小著る借翌日風も好くを四艘の和船潰

成解て船と乗出さる仲丸録事紀何某が船も兼風小住せて大洋と走るわと小

三日むろりと海上穩なりなる小四日申の刻過俄小悪風吹起り怒浪天と浸り

大雨降出し雷電鳴ひし多れ船と洶上洶下とふ船子も大ら驚た地方へ乗者

んと身と揉うち四艘の大船散り離れて海上漂ひしが仲丸も乗る船も幸して

安南國漂着し清川古名号船丸洲種が嶋へ流し者夫より都より判官

乃船如何なりや行方と知者なり斯て仲丸が船安南國小者し所小此四人ハ

禽獸おひし仁義と知ぬ猛悪の者ともあれ大勢器械と携りて群来り船中

小疲臥さる下司船子亦と悉く擧殺し仲丸と紀の何某兩人繩ひて縛り船を

りも更なり船中の糧米衣服器物小る近残をち奪ひ兩人の膚を曳き

城へ歸り國手と覺る者の前曳居り時小國王左右の者小何れ令々兩人を

己小切害きせんともむを仲丸を厲我是唐帝の近臣左補闕朝衙なり

你ホも我と害せむ後日必と唐帝の外と受殊伐を蒙るぞと云々は彼國

王鋼刀と持し者と制し兩人の縛と解者下官小命とて仲丸と紀を

り出さる是亦依て仲丸を危れ一命と全り再び唐朝へ歸りて便と求む

紀氏と曰道もあぬ夷番の國と往てまゝ艱難とさるら紀氏も苦難と

終小路上小て病死たりたり夫より仲丸は独歩して唐王と語りて尋行なる唐朝

終小路上小て病死たりたり夫より仲丸は独歩して唐王と語りて尋行なる唐朝



おて八朝衛が船難風小遭て覆り朝衛溺死せりと風説一たり李白其死を悼いて

李白

日本晁卿辭帝都

征帆一舸繞蓬壺

明月不歸沈碧海

白雲秋色滿蒼梧

と七言絶句の詩を賦して哀れ其餘の詩友も大に惜み歎れり李白其死を悼いて  
仲九存命して唐朝へ歸りて皆蘇生の人小逢て悦びて其無事と賀し玄宗  
帝も御歡あつて再び左右侍せしむる然も玄宗帝の嬖臣安禄山も倭奸  
邪惡の賊臣にて揚國忠と心を拜し玄宗帝と弑して唐の代を暮んと兼て注意と  
企てる小仲九も略万人秀且又勇氣妻力の英雄にて常も帝の左右を去れり大  
望の妨と思ひ煩ひる小幸も去年歸朝せしむる同の上の痛を除く心地と悦びる小  
今年又歸きりて帝も再勤る小安禄山大に仲九を忌惡し如何もして追退

けんを邪謀とて夫々多う忽ち一の奸計を帝に出揚國忠は而も足下朝衛小逢て  
如斯く説めると私語を揚國忠點首て仲九も面會し足下昨年の秋歸朝せ  
んとて出帆せられ其後街の風説も足下の船難風小覆り海底小溺死有由專  
と言觸るる由我も安禄山も大に惜し悼し不斗存命を歸れり朝廷の  
幸福も我後も悦み不堪依て一宴を催し賀を表せん欲せり幸も今中秋にて明  
日十五日あるを凌雲臺にて足下と賀するも賞月の宴を催さず万望未臨せ  
まこと宛を巧みと言れが仲九其奸計の成勢もあまを拜謝して曰不肖の小官  
と愛しめて賀酒を賜らる仰る我争う背れぬを明衆必と推察して末席を  
汚しぬると縊れど揚國忠仕とすたりと悦び固く契約して別は安禄山小斯と  
報れぬむ練成ると悦び其準備をたかふる程なり十五夜おられり安禄  
山揚國忠も凌雲臺と号し高樓の酒宴の設をたし使者を以て仲九と結し大に



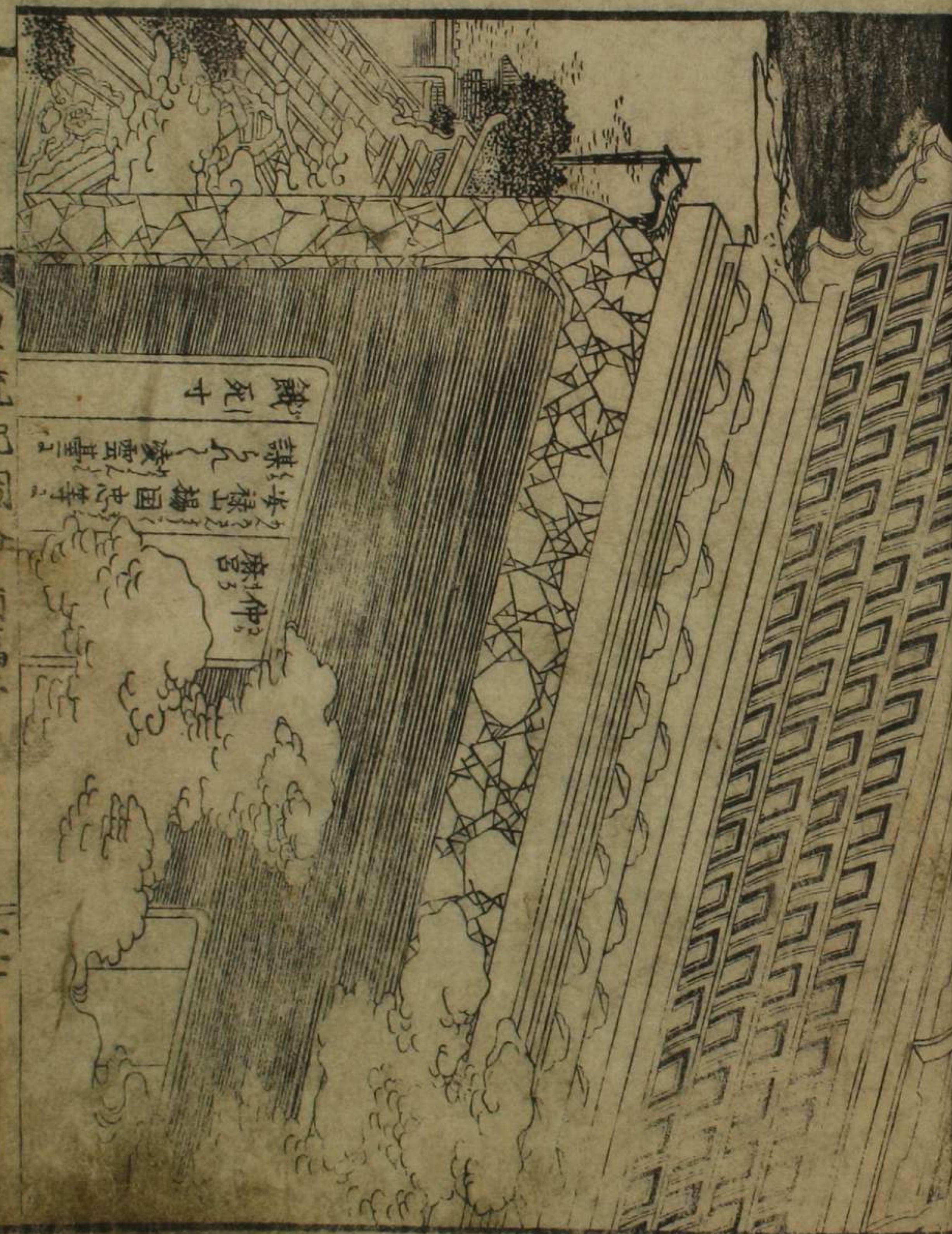
酒宴を用れ山海の珍味と尽し妓樂を奏しと管侍々々仲丸程の智者り  
運の足る所小や是を毒針も情も強も休量は過る程厄と重ね大の酔  
と帯て勾欄小倚り振仰て天を望むと天快く暗て一朶の雲も名小あふ中秋  
良夜の月山の端と放きて高く澄昇金波眼と射て羞明も影さるる仲丸  
暗光小向いて心中小思々々去年明州の港小て学友と送別の丕丕取て天の原  
の歌と詠せし今宵の如く暗光あつた其砌難風小遭とんて疾帰朝と此  
名月と古卿の三笠山小て妻子と俱小賞せんものと尚人の圃小憂光陰を送る  
更よと嘆息し愁思胸小元塞り欄小頭と傾て世と恨と身と悔と々々酒気  
乃為小眠萌し不思少時間睡々々秋風の袷元吹とむ小驚れ是は我が不敬と  
せんと身とてと席ととんれと只盃盤の狼藉と斗小て安禄山揚國忠ととめ  
と。其他酒宴小侍し者酌と様し童子と居と其身の影の余八人影絶と無

マ々々又仲丸小訝り何更の有て皆樓と下とんと独言し待もくお者一人  
登り来とと余小待りてととと拍鳴し或は高声維彼と名と呼と絶て答る者  
ゆたの廣たる高殿小其身只一人のゝれを寂寥と物凄點列し銀燭も漸く小  
消且とも蠟燭と易小来んもせれと更小不審暗と此六我も樓を下んと搔とて  
階の際へ到り小見小是如何小も長も階と引て下る便なり大い小後て  
此方の措の方いり見小口は是も引り倍速く此所彼所と徘徊も更小下る  
た方便もなり。原来此凌雲堂は高れ更三十丈小て棟の麓ハ雲小沖とる昔この樓  
成就せし時如何なる更也や未と文字と書とる額と高れ擔小掛り是小依り  
時の能書と畚小入高く額の際とて鈎とて凌雲堂の三字と書せ書畢て後畚  
成曳却しるる小毫と揮し人始髪烏も小畚と出る時小悉く白髪とたや  
細り是額通く鈎とれ時下の遙小遠とて暗見心陰ととと深く怖りぬ髪





津野半右衛門



誠死

謀人 凌雲基  
安禄山 楊国忠等

磨 仲



長嶺とも白く妻ざりありける高樓、欺登りせ所、指と引れを異なりて、下り  
かちり。茲に於て仲九始て心付、宿安、緑山、楊國、忠我、此高樓、賺し登り、め  
指と引く、餓死せんとの奸計、かりける。其とも察せ、と過て、邪謀、陥し悔  
さると、躍上り、足指、く牙と咬て、怒り、悔も、今更施と、存た術も、た天と仰  
長嘆、噫、非運、多し、我、適、勅命、奉りて、三、余里、隔し、異域、渡り、彼、層  
術の書と得ん、め、異國の王、膝と屈、仕、更、十六年、君忠、を重ん、て、家と忘、れ、妻子  
以捨、幸、して、沙王の秘書と、心、暗記、せ、千、苦、万、勞、水、の泡、と消、今、此、樓、上、小、識  
死せん、とも、天、余、命、倭國の、八百、萬、神、の、仲九、が、誓、忠、と、見、捨、る、と、身、の、悲、さ  
小神、祇、を、死、忍、て、無、念、の、牙、と、嚙、鳴、し、兩、眼、より、流、る、血、涙、二、條、の、滝、の、く、彼、古  
の、涯、の、大臣、が、燈、臺、鬼、の、耻、辱、と、受、悲、さ、も、今、身、の上、小、思、知、れ、恨、は、怒、つ、衣、服、を  
劈、た、其、夜、に、十、万、無、量、の、悲、し、小、泣、明、し、翌、日、小、あ、れ、も、樓、上、上、り、来、る、者、も、か、れ、が

独、依、倭國、の方、を、望、み、天、と、鳥、の、羽、と、羨、み、て、凋、然、と、す、針、かり、く、猶、飢、小、望、ま、れ、  
器、皿、小、残、し、肉、菜、と、食、し、一、日、二、日、と、歎、れ、暮、し、泣、明、し、果、へ、喰、む、物、も、な、あ、ま  
くれ、を、屏、風、障、子、の、紙、を、食、し、左、右、と、十、余、日、と、過、し、漸、く、小、身、筋、瘦、衰、へ  
氣、力、弱、し、心、神、暗、く、強、て、氣、と、厲、し、我、日、本、と、出、る、時、舍、人、親、王、小、誓、言、  
言、も、あ、り、よ、や、此、樓、上、小、飢、死、す、も、一、念、の、靈、幽、鬼、と、な、り、再、び、曆、書、と、求、ん  
と、入、唐、と、る、人、を、補、佐、し、彼、玉、兔、集、と、倭、國、へ、渡、り、や、已、命、今、六、空、に、餓、死  
と、る、我、待、ち、を、め、わ、く、舌、咬、断、て、相、果、あ、ん、せ、め、て、去、年、跡、せ、し、歌、と、妻、子、の、記、  
念、小、書、残、さん、と、四、辺、と、ん、と、も、筆、墨、も、不、有、む、下、襲、の、白、衣、の、袖、を、引、裂、き、  
右、手、の、小、指、と、嚙、切、其、血、泣、と、以、て、白、衣、の、袖、  
天、の、原、あり、さ、け、ん、と、む、春、日、か、る、三、笠、の、山、小、出、し、月、も、  
と、書、終、り、遂、小、舌、と、喰、切、て、死、し、り、生、年、三、十、三、才、かり、城、日、本、の、一、美、雄、不、幸



少く其志と遂を望く望郷の思と成り更惜むる嘆と云ふ後  
吉備公此天の原の歌と倭國の傳へられ貫之が選り古今集にも西騎旅乃  
部小入らるる月夜をよめるの約書と添ふる慈鎮和尚も此天の  
原の歌と本歌ふらりて

天のそらふらりけ今や三笠山ゆへりうは澄る月影

と詠せられ又貫之の書し土佐日記の仲九が唐土にて三笠山の月の歌とよ  
よと載るるは仲九屍を異國の土に歸りしれども名は倭漢書史に留る

聖武天皇御受禪 満月丸皇從討好根條

却説本朝の聖武天皇養老七年小御即位より人皇四十五代の帝と  
仰れり御諱は天爾國押用豊櫻彦御父文武天皇御母は藤原の夫人  
と申淡海公の女たり養老八年二月御即位の大禮を執行し神龜元年と

改元ある是去年十月紀臣家より者白色龜成献し故たり斯て先帝元を  
太上天皇と尊稱せられぬ也小神龜六年小改元あり天平元年とあり  
日二年太上天皇仲九が入唐してより己未十四年の星霜を歴ども未だ帰朝せざり  
我待ひぬ日年小藤原清川と遣唐使として入唐させぬ小就仲九存命あり  
を舟船とて帰朝せんと途のゆる小和三年 天平 清川古六呂以下帰朝し舟内  
て安部仲九をも舟船といふ海上にて大難風小遭臣亦舟船に停て九州種々嶋々著  
いとも仲九が乗し船と録事の船に更不行方と不知いと奏聞しるるを當今も太  
上皇も深く驚きせぬ如斯く仲九水死せしや又存命とあり其生元皇親也此上  
と再び智也勝と者撰入唐させて金鳥玉免集と需ませ日本小曆通三所  
いと舎人親王勅詔しゆる舎人親王勅命と奉り歸館の上其機小由る後  
たの人を維彼と勤へられざる小當時仲九が才小劣る者八下道吉備小限りと



即ち使者を以吉備とて招く。吉備公俄小振政治家より召る。如何なる御用  
小やと不審暗ねど。即時の衣冠を改めて使者と俱小親王の館へ奉向せられり。  
因小吉備公此時の名真備にて入唐して曆書と需得帰朝有。後朝廷より  
吉備とりの名を賜りてあれも。真備とひて八婦人見あどの中より難れとて  
始より吉備とりの名を。譬を淡海公ハ没後の縁にて存生中の名ハ不比等あれど  
由然のひてと安より難れぬ存生中より淡海公とひてかたり。

斯て吉備公泰上の由中入れを客殿へ請ひて親王對面あり。諸士吉備公仰ま  
只今招れし私の義おあを。先年曆書致求まらん。安部仲九と入唐させし  
所仲九唐上小田学とて。更十六年。儀小唐帝の臣とたり。遂小玉兒集とて。暗記と  
る妻を得。遣唐使清川と俱小帰朝の船小乗る。海上にて難風。遣唐使  
が船ハ覆りしや不。其生死定りあを。故小才略ある者と撰り入唐させ。仲九は

死を回れ。存命とるを。同伴とて帰朝。若死せざらむ。唐帝おを。彼金  
鳥玉兒集と借来疾帰朝させむ。との勅命あり。今般仲九の如く年數と重  
更たる。玉と三羊と限とて。詔命あり。今朝廷小此御使と奉りし者。恐  
らく。他の他有る。ず。國家万民の爲かれ。勞と辞せ。唐主へ渡り。彼曆書を  
借得て速小帰朝し。いと有れ。吉備公低頭平身。無能不才の臣群臣乃  
中より御撰出し。預り。る大切の勅使と命。ま。更身乃大慶。是。過。臣  
短才あれ。彼赤渡り。機臨。妻小應。其玉兒集と得て。帰朝仕。る。小  
領掌あり。る。小。舍人親王。御喜悅あり。然。立。歸り。隨從の人数と定  
り。出。して。御暇を。ま。吉備公拜謝して退出。し。郎舍。へ。  
子家人縁。縁の人。小。宣旨の趣を。語り。安。事。入唐の準備と。急。れ。る。  
且。說。仲九の難。掌。第。原。江。守。八。主。君。の内。室。若。州。が。遺。書。の。附。託。小。慮。し。侍。り。



稲子と俱小満月丸と守護して平城を落北笠置ある稲子の兄が許へて主家の  
の妻と結り満月丸が身の上の義と頼るる小稲子が兄の農民あれども義と情あ  
者あれを一儀小も及む承引て主後三人を舎藏幸小妻の去年女子と産て乳  
も餘あれ其乳を以て満月丸と育させたる小と江守八人の心を安んじ是より其身  
も鋤鋤を採て主とも小耕り耘り稲子満月丸を守傳く行半小嫂が縫績の業  
を技け左右して春と送り秋と過し仲九の帰朝を待とも其風流ゆえむ却て女  
主の仇ある安部好根八長屋王の媚縮いて朝廷の臣下の端は列り仲九の家督と押領  
一富栄るとの風流八耳の入れむ江守八無念の齒を切たり神佛祈願とめて仲九が  
帰朝を昼夜祈とも愈帰朝の音信はあより夏年月之暮て満月丸を不  
十才小成々も江守八昼の耕作の疲勞をも厭ふ夜も手跡盡くを教導  
た十二才の年より弓矢劍術等と教ふる流石仲九が流石と満月丸成長小後ハ

痕小勝を生得聰明穎悟して手跡向ひし及む弓矢劍の技も上達し己小  
十六才小なり今ハ師も江守八及む事多れ江守稲子の感懐も甚だしく  
多年待たれり仲九も遣唐使といふ船と唐土に出帆せりも海上にて難風小あひ  
仲九が乗し船が覆りしも風流一又ハ行方あれどもいつて一定あれも其生死定あ  
かれ江守八大急ぎ失ひ如何とぞと強心を苦るる小此頃又吉備大臣勅命小依て唐  
書と承ん入唐ある小街小絶歌とる小江守八堪る小満月丸と人あれ所へ招  
外低声小告るる小兼て時々トト如く御父仲九公ハ勅命小依て入唐去る小其母  
身のまが生れかりぬ以前の妻あて早十六年の春秋も御帰朝の音信あ却る云  
年遣唐使帰朝の船小は船と唐土に出帆し海上にて難風小遭りし御父仲九  
公の船が覆りしとも又ハ行方あれども風流の事も其母依て吉備公小唐土宣上思蒙  
りり小當年中出帆ある小是又治定なりと言觸し小御身も吉備公小願ひ被御



乃奴僕ゆ成りなりとも入唐して脚文の生死を同極めり。夫は就脚身小目で進  
と品あり。今道はかり子細有て白隠し。母公の御紀念にていそし  
より彼若州が末期の際小書残せり。文を取出して渡り。されば満月九夜先年我母  
ま如何成り。と問へ。即ち病死有りと。答て。御遺物有とも言ふ。と恨れ  
と言つ。封押切て續事一遍。後世とて江守小對の此脚文の約なき。子細あり  
て我と刃やうを死とあり。成人の後跡を懸小吊り。と書り。命を你の病死有りと  
し。此文の約にてハ自害あり。事明白おせ。迫て問ふ。と江守小令更  
其時の愁傷と思ひ出。不覺の涙ふれ。多か。稍涙を掻り。後世の六理り。や  
脚病死とせ。偽言にて。緘し。脚身の三才かり。のよ。半生君の兄好根と。無道  
人脚身の母公無体乃不義を言け。従は。幼た脚身と害せん。言怖せり。の  
万一其約のて。脚身と害る。更り。と。暗小。稲子小脚身と懐せ。其脚文と我乃脚

道書と添のひて。鎖と潜出させ。脚身の養育の義と思臣小純。其身小節操を  
守て。刃の仗り。夫と稲子と高議。君と此郷。伴ひ進。せ。稲子の嫂乃乳を  
以て。音進。せ。仲九公の脚帰朝あり。待小。甲斐あり。全月。君と。人心付り。半  
小成り。母公の横死の更告進せん。と思ひ。悲し。余小。外り。自然伯又  
好根殿の耳小。入脚為。悪き。更の。出来。は。慮り。詳と。今日。中を。告知。せ。す。守。出  
い。吉備公の。隨從。して。入唐。志。し。不。付。て。母公の。仇。と。好根殿。を。太刀。恨。ら。む。公  
と。脚。小。脚。對。面。あり。人。時。母。如何。と。問。ひ。小。病。死。あり。と。答。ふ。乃。無。念。あり。斯  
實。情。朝。し。ち。か。り。と。結。ぶ。と。満。月。九。夜。憤。然。と。怒。り。我。を。何。と。早  
告知。せ。ざ。好根。が。所。為。て。非。命。の。死。を。た。り。の。ひ。り。を。好根。ハ。僕。小。天。を。戴。り。ま  
母の。仇。かり。い。て。彼。が。住。所。へ。踏。を。太刀。恨。ら。む。と。証。出。せ。成。江守。小。塞。り。て。死  
血。氣。ふ。逸。り。の。よ。好根。全。安。部。の。家。督。と。押。領。し。朝廷。小。勤。仕。は。か。家人。も。さ



い登るれを有活の向公の承水意を逆めずて却て向身をなす下は其意を以て  
其不意我討ふ不如と練ゆるれ満月丸漸く速る心と鎮むるを如何す本意  
我達ををれと向江守が曰古への諫讓が身小添さると瀨病とかり主の執事  
しとや。されば其謀ふ做ひ君の小目も面を塗汚し。身小綴衣と煙ひ非人の体小  
姿を仮装し。春日野と徘徊して好根の出入を窺ひ便宜と見合せ名告うけて勝負  
かりのふりごとを示し満月丸承伏し。実此計策其ををりて巨細を稲子足妹小  
結り多の煤泥あふて面を汚し。髪を乱し鶏後と著しと刀を拵ふ志とく是は持  
夜中ふは置置とて平城に赴た春日野三笠山の辺を徘徊し専ら好根と討ふと  
狙ひ多の且統好根の安部の家督と押領し。長屋王の吹捧ふて朝廷の公用を奉る  
身とかり。今六雑俎と手心の依小挙動を或日己が幼老と祝せんとは察の輩五  
六人を招請し。宵より酒宴を催て管持し。或は江守疾く此更と探りやう



